

1月27日に日本野球規則委員会より、2021年度の野球規則改正が発表されました。改正点については大きく2点です。

(1) 投手の投球動作の時に軸足で2度目のステップを踏むことを禁止していたが、軸足とは逆の踏み出す足の2度目のステップも禁止となります。

(2) 従来はファウルチップの定義で、チップしたボールが最初に捕手の手、またはミットに触れてから身体、または用具に当たってはね返ったものを捕手が地上に落ちる前に捕球した場合はストライクとされていましたが、「最初に捕手の手、またはミットに触れていなくても」身体、または用具に当たってはね返ったものを捕手が地上に落ちる前に捕球した場合は、ストライクとすることに変更となります。

また、大リーグで昨季から採用された「投手のワンポイントリリーフ禁止」について、日本では適用しないことが規則に明記されました。現時点ではオリンピックなど国際大会で同ルールが採用されるかは不明ですが、採用される場合は日本でも来季以降に見直しの可能性もあります。

また、提訴試合の項目が削除されました。

発表された内容は以下のとおりで、**赤く**表示した部分が改正された内容です。

現 行	改 正 後
<p>3.02 バット (c)バットの握りの部分(端から 18 ㇿ(45.7 ㇿ))には、何らかの物質を付着したり、ザラザラにして握りやすくすることは許されるが、18 ㇿの制限を超えてまで細工したバットを試合に使用することは禁じられる。 【付記】 審判員は、打者の使用したバットが、打者の打撃中または打撃終了後に、本項に適合していないことを発見しても、打者にアウトを宣告したり、打者を試合から除いたりする理由としてはならない。 【原注】 パインターールが18 ㇿの制限を超えて付着していた場合には、審判員は、自らの判断や相手チームからの異議があれば、バットの交換を命じる。制限を超えた部分のパインターールが取り除かれた場合だけ、打者は以後その試合でそのバットを使用することができる。 バットの使用以前に指摘がなければ、本項に適合していないバットによるプレイはすべて有効であり、また、そのプレイについて提訴は認められない。</p>	<p>3.02 バット (c)バットの握りの部分(端から 18 ㇿ(45.7 ㇿ))には、何らかの物質を付着したり、ザラザラにして握りやすくすることは許されるが、18 ㇿの制限を超えてまで細工したバットを試合に使用することは禁じられる。 【付記】 審判員は、打者の使用したバットが、打者の打撃中または打撃終了後に、本項に適合していないことを発見しても、打者にアウトを宣告したり、打者を試合から除いたりする理由としてはならない。 【原注】 パインターールが18 ㇿの制限を超えて付着していた場合には、審判員は、自らの判断や相手チームからの異議があれば、バットの交換を命じる。制限を超えた部分のパインターールが取り除かれた場合だけ、打者は以後その試合でそのバットを使用することができる。 バットの使用以前に指摘がなければ、本項に適合していないバットによるプレイはすべて有効である。 削除</p>

<p>5.07 投手 (a) 正規の投球姿勢</p> <p>投球姿勢にはウィンドアップポジションと、セットポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも随時用いることができる。</p> <p>投手は、投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。</p> <p>【原注】投手がサインを見終わってから、投手板を外すことはさしつかえないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は、審判員によってクイックピッチと判断される。投手は、投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。</p> <p>投手が、サインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。</p> <p>投手は投球に際して本塁の方向に2度目のステップを踏むことは許されない。塁に走者がいるときには、6.02 (a) によりポークが宣告され、走者がいないときには、6.02 (b) により反則投球となる。</p>	<p>5.07 投手 (a) 正規の投球姿勢</p> <p>投球姿勢にはウィンドアップポジションと、セットポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも随時用いることができる。</p> <p>投手は、投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。</p> <p>【原注】投手がサインを見終わってから、投手板を外すことはさしつかえないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は、審判員によってクイックピッチと判断される。投手は、投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。</p> <p>投手が、サインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。</p> <p>投手は投球に際してどちらの足も本塁の方向に2度目のステップを踏むことは許されない。塁に走者がいるときには、6.02 (a) によりポークが宣告され、走者がいないときには、6.02 (b) により反則投球となる。</p>
<p>5.09 アウト (a) 打者アウト</p> <p>打者は、次の場合、アウトとなる。</p> <p>(2) 第3ストライクと宣告された投球を、捕手が正規に捕球した場合。</p> <p>【原注】“正規の捕球、”ということは、まだ地面に触れていないボールが、捕手のミットの中に入っているという意味である。ボールが、捕手の着衣または用具に止まった場合は、正規の捕球ではない。また、球審に触れてはね返ったボールを捕らえた場合も同様である。</p> <p>チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに触れてから、身体または用具に当たってはね返ったのを、捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、ストライクであり、第3ストライクにあたるときには、打者はアウトである。また、チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに当たっておれば、捕手が身体または用具に手またはミットをかぶせるように捕球することも許される。</p>	<p>5.09 アウト (a) 打者アウト</p> <p>打者は、次の場合、アウトとなる。</p> <p>(2) 第3ストライクと宣告された投球を、捕手が正規に捕球した場合。</p> <p>【原注】“正規の捕球、”ということは、まだ地面に触れていないボールが、捕手のミットの中に入っているという意味である。ボールが、捕手の着衣または用具に止まった場合は、正規の捕球ではない。また、球審に触れてはね返ったボールを捕らえた場合も同様である。</p> <p>チップしたボールが、最初に捕手の身体または用具に触れて、はね返ったものを捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、ストライクであり、第3ストライクにあたるときには、打者はアウトである。</p>
<p>5.10 プレーヤーの交代 (g) ある投手に代わって救援に出た投手は、そのときの打者または代打者がアウトになるか一塁に達するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。</p> <p>ただし、投手が負傷または病気のために、それ以降投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。</p> <p>以下はマイナーリーグで適用される。先発投手または救援投手は、打者</p>	<p>5.10 プレーヤーの交代 (g) ある投手に代わって救援に出た投手は、そのときの打者または代打者がアウトになるか一塁に達するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。</p> <p>ただし、投手が負傷または病気のために、それ以降投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。</p> <p>以下はマイナーリーグで適用される。先発投手または救援投手は、打者</p>

<p>がアウトになるか、一塁に達するかして、登板したときの打者（または代打者）から連続して最低3人の打者に投球するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、それ以後投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。</p>	<p>がアウトになるか、一塁に達するかして、登板したときの打者（または代打者）から連続して最低3人の打者に投球するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、それ以後投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。</p> <p>【注】本項後段については、メジャーリーグでも適用されるが、我が国では適用しない。</p>
<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (a) 打者または走者の妨害 (10) 走者が打球を処理しようとしている野手を避けなかったか、あるいは送球を故意に妨げた場合。</p> <p>ただし、2人以上の野手が接近して、打球を処理しようとしており、走者そのうち1人か2人以上の野手に接触したときには、審判員は、それらの野手のうちから、本項の適用を受けるのに最もふさわしい位置にあった野手を1人決定して、その野手に触れた場合に限ってアウトを宣告する。 (5.09b3 参照)</p> <p>【原注】 捕手が打球を処理しようとしているときに、捕手と一塁へ向かう打者走者とが接触した場合は、守備妨害も走塁妨害もなかったものとみなされて、何も宣告されない。打球を処理しようとしている野手による走塁妨害は、非常に悪質で乱暴な場合にだけ宣告されるべきである。たとえば、打球を処理しようとしているからといって、走者を故意につまずかせるようなことをすれば、オブストラクションが宣告される。</p> <p>捕手が打球を処理しようとしているのに、他の野手(投手を含む)が、一塁へ向かう打者走者を妨害したらオブストラクションが宣告されるべきで、打者走者には一塁が与えられる。</p>	<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (a) 打者または走者の妨害 (10) 走者が打球を処理しようとしている野手を避けなかったか、あるいは送球を故意に妨げた場合。</p> <p>ただし、2人以上の野手が接近して、打球を処理しようとしており、走者そのうち1人か2人以上の野手に接触したときには、審判員は、それらの野手のうちから、本項の適用を受けるのに最もふさわしい位置にあった野手を1人決定して、その野手に触れた場合に限ってアウトを宣告する。 (5.09b3 参照)</p> <p>走者がファウルボールに対する守備を妨害したとして、アウトを宣告され、これが第3アウトにあたる場合、打者走者は打撃を完了したものとみなされ、次のインニングの第1打者は次打者となる。(0(ノー)アウトまたは1アウトのときは、打者はそのまま打撃を続ける。)</p> <p>【原注】 捕手が打球を処理しようとしているときに、捕手と一塁へ向かう打者走者とが接触した場合は、守備妨害も走塁妨害もなかったものとみなされて、何も宣告されない。打球を処理しようとしている野手による走塁妨害は、非常に悪質で乱暴な場合にだけ宣告されるべきである。たとえば、打球を処理しようとしているからといって、走者を故意につまずかせるようなことをすれば、オブストラクションが宣告される。</p> <p>捕手が打球を処理しようとしているのに、他の野手(投手を含む)が、一塁へ向かう打者走者を妨害したらオブストラクションが宣告されるべきで、打者走者には一塁が与えられる。</p>

<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (d) 競技場内に入ることを公認された人の妨害</p> <p>競技場内に入ることを公認された人(試合に参加している攻撃側メンバーまたはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く)が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。</p> <p>しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。(4.07a 参照)</p> <p>【原注】本項で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については 6.01 (b) 参照。審判員による妨害については 5.06 (c) (2)、同 (6) および 5.05 (b) (4)、走者による妨害については 5.09 (b) (3) 参照</p> <p>妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。</p> <p>たとえば、バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールを蹴ったり、拾い上げたり、押し戻した場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害とみなされる。</p> <p>例一 打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。一塁ベースコーチは送球に当たるのを避けようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁にまで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。</p>	<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (d) 競技場内に入ることを公認された人の妨害</p> <p>競技場内に入ることを公認された人(試合に参加している攻撃側メンバーまたはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く)が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。</p> <p>しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。(4.07a 参照)</p> <p>【原注】本項で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については 6.01 (b) 参照。審判員による妨害については 5.06 (c) (2)、同 (6) および 5.05 (b) (4)、走者による妨害については 5.09 (b) (3) 参照</p> <p>妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。</p> <p>たとえば、バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールを 拾い上げたり、捕ったり、意図的に触れたりすることや、押し戻したり、蹴ったりすれば、この行為は故意の妨害とみなされる。</p> <p>例一 打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。一塁ベースコーチは送球に当たるのを避けようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁にまで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。</p>
<p>6.04 競技中のプレーヤーの禁止事項 (d) 監督、プレーヤー、コーチまたはトレーナーは、試合から除かれた場合、ただちに競技場を去り、以後その試合にたずさわってはならない。</p> <p>試合から除かれた者はクラブハウス内にとどまっているか、ユニフォームを脱いで野球場構内から去るか、あるいはスタンドに座る場合には、自チームのベンチまたはブルペンから離れたところに席をとらなければならない。</p> <p>【原注】出場停止処分中の監督、コーチ、プレーヤーは、試合中ダッグアウト、クラブハウス、新聞記者席に入ることはできない。</p>	<p>6.04 競技中のプレーヤーの禁止事項 (d) 監督、プレーヤー、コーチまたはトレーナーは、試合から除かれた場合、ただちに競技場を去り、以後その試合にたずさわってはならない。</p> <p>試合から除かれた者はクラブハウス内にとどまっているか、ユニフォームを脱いで野球場構内から去るか、あるいはスタンドに座る場合には、自チームのベンチまたはブルペンから離れたところに席をとらなければならない。</p> <p>【原注】出場停止処分中の監督、コーチ、プレーヤーは、ユニフォームを着てクラブの試合前の練習に参加することはかまわないが、試合中は、ユニフ</p>

	<p>オームを着ることはできず、プレーヤーが試合にたずさわる場所から離れていなければならない。また、出場停止中の者は試合中、新聞記者席や放送室の中に入ることはできないが、スタンドから試合を見ることは許される。</p>
<p>7.04 プロテストイングゲーム(提訴試合)</p> <p>審判員の裁定が本規則に違反するものとして、監督が審議を請求するときは、各リーグは試合提訴の手続きに関する規則を適用しなければならない。審判員の判断に基づく裁定については、どのような提訴も許されない。提訴試合では、リーグ会長の裁定が最終のものとなる。</p> <p>審判員の裁定が本規則に違反するとの結論が出た場合であっても、リーグ会長において、その違反のために提訴チームが勝つ機会を失ったものと判断しない限り、試合のやり直しが命ぜられることはない。</p> <p>【原注】監督が試合を提訴するには、提訴の対象となったプレイが生じたときから、投手が次の1球を投じるか、または、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てるまでに、その旨を審判員に通告していない限り、提訴は認められない。</p> <p>試合終了のときに生じたプレイについて提訴するときは、翌日の正午までにリーグ事務局に申し出ればよい。</p> <p>【注】アマチュア野球では提訴試合を認めない。</p>	<p>7.04 プロテストイングゲーム(提訴試合)</p> <p>審判員の判断に基づく裁定についての異議であろうが、審判員の裁定が本規則に違反して決定したことに対する異議かにかかわらず、どのような提訴も許されない。</p>
<p>審判員に対する一般指示 (前略)</p> <p>提訴試合にもなりかねないほどの悪い事態が起こった場合、その事態の解決を回避したという非難を受けるようなことがあってはならない。常に規則書を携行し、紛糾した問題を解決するにあたっては、たとえ10分間試合を停止することがあっても、よく規則書を調べ、その解決に万全を期して、その試合を提訴試合あるいは再試合にしないように努めなければならない。</p> <p>(後略)</p>	<p>審判員に対する一般指示 (前略)</p> <p>試合中に悪い事態が起こった場合、その事態の解決を回避したという非難を受けるようなことがあってはならない。常に規則書を携行し、紛糾した問題を解決するにあたっては、たとえ10分間試合を停止することがあっても、よく規則書を調べ、その解決に万全を期して、その試合で不注意な規則適用の誤りをしないように努めなければならない。</p> <p>(後略)</p>

<p>9.01 公式記録員 (b) (3) 提訴試合または一時停止試合となった場合には、記録員は、提訴または一時停止になったときの状態を、得点、アウトの数、各走者の位置、打者のボールカウント、両チームの打順表、交代して退いたプレーヤーにいたるまで、詳細かつ正確に報告しなければならない。 【原注】一時停止試合で重要なことは、停止されたときと全く同じ状態から再開されなければならないことである。提訴試合において、交代して退いたプレイ以後は無効として、やり直しが命じられた場合は、そのプレイの直前と全く同じ状態から再開されなければならない。</p>	<p>9.01 公式記録員 (b) (3) <u>削除</u> 一時停止試合となった場合には、記録員は、<u>削除</u> 一時停止になったときの状態を、得点、アウトの数、各走者の位置、打者のボールカウント、両チームの打順表、交代して退いたプレーヤーにいたるまで、詳細かつ正確に報告しなければならない。 【原注】一時停止試合で重要なことは、停止されたときと全く同じ状態から再開されなければならないことである。 <u>削除</u></p>
<p>本規則における用語の定義 34 FOUL TIP「ファウルチップ」- 打者の打ったボールが、鋭くバットから直接捕手の手に飛んで、正規に捕球されたもので、捕球されなかったものはファウルチップとならない。ファウルチップはストライクであり、ボールインプレイである。前記の打球が、最初に捕手の手またはミットに触れておれば、はね返ったものでも、捕手が地面に触れる前に捕らえれば、ファウルチップとなる。(5.09a2) 【注】チップしたボールが、捕手の手またはミット以外の用具や身体に最初に触れてからはね返ったものは、たとえ捕手が地面に触れる前に捕らえても、正規の捕球ではないから、ファウルボールとなる。</p>	<p>本規則における用語の定義 34 FOUL TIP「ファウルチップ」- 打者の打ったボールが、鋭くバットから直接捕手<u>削除</u>に飛んで、正規に捕球されたもので、捕球されなかったものはファウルチップとならない。ファウルチップはストライクであり、ボールインプレイである。 <u>削除</u> <u>削除</u></p>
<p>46 LEAGUE PRESIDENT「リーグプレジデント」(リーグ会長) - リーグ会長は本規則の施行の責任者であり、本規則に違反したプレーヤー、コーチ、監督または審判員に制裁金または出場停止を科したり、規則に関連する論争を解決し、または提訴試合の裁定を行なうものとする。 【原注】メジャーリーグでは、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。 【注】我が国のプロ野球では、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。</p>	<p>46 LEAGUE PRESIDENT「リーグプレジデント」(リーグ会長) - リーグ会長は本規則の施行の責任者であり、本規則に違反したプレーヤー、コーチ、監督または審判員に制裁金または出場停止を科したり、規則に関連する論争を解決<u>削除</u>する。 【原注】メジャーリーグでは、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。 【注】我が国のプロ野球では、本規則のリーグ会長の職務はコミッショナーの指名した者によって遂行される。</p>